

少年ナイフ!

海外での評価はまず口コミのレベルで広まったという。それだけにその人気の裏付けはメディアに操作されたものではない確かなものだ。そしてどんなに世界的評判が高まろうと、彼女達はすうっと、変わらない。



協力
Virgin music JAPAN
MCAピクチャー FM802
取材・文・ポラロイド写真
早川加奈子



少年ナイフはスコイ。何がスコイって、彼女達は今やオノ・ヨーコよりも世界中にファンを持つ日本人ロック・アーティストであるにも関わらず、全然「普通」だから、である。この「普通」であることが、実は最も難しいってことは多くの人が知ってる事実だ。それを事もなげにやっていていながら国際的ロック・バンドっていう辺り、ただものじゃないわけだ。

少年ナイフの人気は、日本よりも海外で先に火が付いた。正確に言えばもちろん日本なのだけれど、昨年8月にメジャーのレコード会社MCAビクターからデビューする直接的な要因となったのは、海外での高い評価、だった。「この辺までは、全国ネットの朝のワイドショー番組でも取り上げられていたの、御存知の方も多いと思う」「ここでの海外での高い評価、について少し説明したい。

世界的にロック・シーンはここしばらく、グランジと呼ばれる、ヘヴィでノイズでアグレッシブでありながら、飄々とした掴み処のなさも持ち合わせたサウンドが人気である。そのグランジ・バンドの頂点に立つバンドの一つ、ニルヴァーナが少年ナイフにぞっこん惚れこんでる、といえは少しは憂鬱気味を挿んでもらえるだろうか。スタジアム級のコンサート会場を満杯にし、世界中中くまなくライブ・ツアーに回るようなビッグ・ネームから直々に「一緒にライブ・ツアーを回らないか？」とアプローチされるバンドなんて、世界で探してもそうそうあるわけじゃない。

その希有なバンドが正に少年ナイフなのだ。

このニルヴァーナとの海外ライブ・ツアーの間にも、少年ナイフは着々とファンを増やしていき、コンサート会場はほとんどすべてがオールスタンディングの2500人以上収用可能な大ホール。大学の講堂や昔の劇場やダンスホールを改造したところもあったそうだ。そこで少年ナイフがメイン・アクトのニルヴァーナに負けずおらずの熱い支持を受けたのであった。

とくれば、さぞかしイケスカない姉ちゃんだろうといふ方も多いかもしれない。しかし、冒頭で書いたとおり、彼女達がスコイのは、こんな状況になってもあくまでも普通。だからである。何しろ今回の国内ツアーはすべてがライブ・ハウスで行われる。「オールスタンディングが好き」という彼女達の選での希望らしい。そして約2年振りに京都でもライブを行ってくれたのだ。

レッツ・少年ナイフ

少年ナイフは今から約10年前に誕生する。
「毎日の過酷な日常生活から脱却するためにも、何か面白いことを始めようと思っ、クリエイティブなことがしたいわ」ということでバンドでもしようかという事になった。」
ベースの中谷美智子は当時を振り返って語る。

「同じ学校へ行ってた山野直子さんと、お互いの家を行き来してバンドの構想

を練ってました。直子さんはギターするっていうし、私はベースをするっていうことになったんです。でも、ドラマおらへんなあ、ってことになって、その時、いらっしやい、って敦子ちゃんがお手持つて来たんですね。敦子ちゃんはお直子さんの妹さんだったわけですよ。で、そのまま引きずり込まれたというが、参加することに決まりました。」

「3人共楽路は触ったことがなかったの、コピーすらできない。コピーが難しくしてできないので、初めからオリジナルの曲とか作って、自分達でも弾けるようなのを作っていましたね。」
こんな「失礼」バンドが10年後に世界的なバンドになる、なんて一体だれが予測しただろう。しかし、上手い下手が評価の対象でもないのが音楽、だ。もちろんテクニクが伴っているにしろ、たことではないが、要はセンス。そしてサウンドとバンド自身の魅力なのだ。その点からいくと、少年ナイフは当初から光っていたようにだ。

「初めはライブをするのが目標だったんですけど、一緒にライブしませんか、と誘ってくれる人が結構いたので、ライブはコンスタントにやりましたね。」
退屈から脱却するために始まったバンド活動は、当面の目標だったライブを重なるうちに、やがて次なるステップを踏んでゆくことになる。

「幸運なことに、共演のバンドを鼻に來てた自主制作のレコードを作ってる人が私達のことを気に入ってくれたんですね。で最初のアルバム「パーニング・

ファーム」が33年に出る、という運命になりました。」
ここまでではよくある話である。ここから先のエピソードこそ、少年ナイフの実態を表している、といえるほどの展開だ。

「2年後くらいに次のアルバムを出したりとかしてんですけど、そのうちあるアメリカの若者が日本に遊びに来て、その人は音楽がすごく好きな人で、日本のレコード屋さんに行って色んなレコードを買って持って帰国はったんです。その中にたまたま少年ナイフのインディーズ時代に出したアルバムがあつて、その人がアメリカに持って帰って聴いてすごく気に入って下さって、その人は私達に「アメリカでカセットを出しませんか」と連絡を取ってきて、私達は「アメリカでカセットが出るなんて、まあ嬉しいしやあ出しますっていつて出しました。そのカセットをほとんどアメリカの人が聴いてくれて広がっていった、また他の人の「レコード出しませんか」というアプローチがあつて、アメリカの方でも知られるようになっていったんです。」

「山野敦子が語るこの逸話は事実である。偶然と呼ぶにはあまりにも出来過ぎた話だろう。彼女達自身も「運命の何かがある」と回って、数奇な運命に巻き込まれた」といつて笑うほど、マジックみたいなストーリーだ。しかし奇跡はさらに奇跡を招くのである。

「アメリカでそのうした話だと進行して、イギリスBBC放送のジョン・ピールさんという方の机の上にもなぜか我々

「2-6-1」

「+」



Naoko



Michio



海外人気



Atsuko

『もうして今や日本でも、インディーズ好きのマイリディーのみならず、幅広いリスナーを獲得した少年ナイフ。だが、結果的には逆輸入となっただけで日本の音楽事情については正直なところどんな風か思っているのだろうか。『やっぱり日本は歌謡曲風なのを中心とした、そういうものの方が売れるしねえ。』と、ギターソロで『キキキキキキ』で『クク風』とV.O.のメロディライン。『歌謡曲と何ら変わらないのが多い。』そんな人が日本人は好きなかも知れないし、そういう人達はマーケッティングが広いから。』

海外人気GJIII

のアルバムが置いてあり、イギリスの方でもオンエアしてくれてたんです。ギターの山野直子はそうサバリと語ってくれたが、こうなるのもう拍手もんの展開だ。しかしそのころ日本ではどうだったのか。

『日本の方では相変らずインディーズでやってたんですけど、アメリカではカセット出た後、CDやレコードを出すのがいつばいい来て、もうちょっと大きめのインディーズから出したりするようになったんです。そんな噂を日本側でキャッチされて、昨年8月にアルバム『レッツ・ナイフ』をMCAビクターから出すことになった、というわけなんです。』

『もうして今や日本でも、インディーズ好きのマイリディーのみならず、幅広いリスナーを獲得した少年ナイフ。だが、結果的には逆輸入となっただけで日本の音楽事情については正直なところどんな風か思っているのだろうか。』

『やっぱり日本は歌謡曲風なのを中心とした、そういうものの方が売れるしねえ。』と、ギターソロで『キキキキキキ』で『クク風』とV.O.のメロディライン。『歌謡曲と何ら変わらないのが多い。』そんな人が日本人は好きなかも知れないし、そういう人達はマーケッティングが広いから。』

そんな日本のロック歌謡からはハミ出してしまっている。しかし、だからこそ海外で評価される音楽たりえる。海外で評判がいい、といわれるものには、オリエンタルである、というところが多分にあるものが少なくない。しかし断言する。少年ナイフのサウンドは全然オリエンタルじゃない。どうしても染み出してしまう日本臭さがないのだ。これは根つからの洋楽音痴、だからたろう。ニューミュージックや歌謡曲の洗礼を全く受けてないから、ほとんど外人状態なのである。

『自分達はただ好きな音楽を演奏しているだけなんですけど、洋楽が好きだからそんなのは一っかり聴いてて影響を受けて曲を作ってることあるし』

やっぱりそうだ。

ところで私はかつて本誌でアメリカのギター・バンド、シユガーにインタビューしたことが、彼らは狂狂的な少年ナイフのファンであった。彼らに少年ナイフの魅力を見せたところ、キユートなところ、曲のタイトルがトビックスを揃んでるところ、と驚えてくれた。山野直子にそのことを伝え自身にその辺を分析してもらった。

『歌詞の内容が万国共通の話題ジェリィ・ヒーンズとかバービー人形とかキノコや何とかを題材にしてるから、誰でもわかってくれるのになって思うところもあるし。美智枝さんがニルヴァーナのカートに、少年ナイフを好きな理由は？』と聞いたところ、楽しそうに演奏したりとか、そんな態度が僕は好きだ。』

ファンはマニアック!!

彼女達の熱心なファンであることを自認するアーティストは多い。シユガーはもちろんソニックユース、L7、スマッシング・パンクキッズのメンバーを始め、最も知られるのがサルトンズ・オブ・サ・ビンドロというバンドのナイル。ちよっぴり変態チックなイメージのある彼も、少年ナイフのメンバーの前ではシャイなファン、らしい。『私達に捧げる歌まで作ってくれたり、ロンドンやフライオン、アイルランドのツアーまで私達に連れて来てくれたり、お土産とかもくれました』

また、一般のファンも実に個性的らしい。『NYのニューミュージックセミナリー(業界向けの公開ライブ)に出た時は、プロインディのクロス・ステイニングやショーン・レノンさんも来てくれたはって、でも強烈だったのが、一列にコマのついたローラースケートをはいたまま、僕少年ナイフのファンなんです。今日は皆んなお腹すいたと思っ、ピザを買ってきました。さあーって滑って垂し入れてくれた人(笑)(直子)』

『精機マニアックな人とか面白い人変な人がいっぱい来るんです』(美智枝)

『サンフランシスコのレコード店でサイン会したときは、デザイナーとかいう女の子が服中に人形をいっぱいフラ下げてて、キユービーさんとか縫いぐるみとかをいっぱい縫いつけた格好で、あと粘土で私達3人の顔をペンダントにして作ったのをくれる人とか、帽子のデザイナーで頭つるつるの人とか、

面白いがいっぱいいます(直子)

やっぱり妙だ。少年ナイフはこんなにも妙くいろんなファンに囲まれながら、面白い人が多いんです。と平然と笑っている。どこまでも普通なんである。これがスゴくなくて何なんだい!!?

私達はずっと同じです

少年ナイフのメンバーは、ほんの少し前まで、バンド活動以外の、仕事を持っていた。いわゆるO.L.さんだったのだ(もちろん今は専業のミュージシャン)。そして彼女達は大阪に住んでいる。それは今もそうだ。その辺りの理由を山野直子に尋ねてみた。

『アメリカでもロサンゼルスやNYが音楽の中心だけど、ちよっぴり前だったらシアトルから面白いのがでてた。日本の歌謡曲で有名になりたい人は東京へ行って録音やらするけど、私達はそういう日本の歌謡曲とか聴かないし、あんまり関係ないから、東京行く必要もないし、ずっと大阪にいるというカシジなんです。』

彼女達にとっては大阪(世界(アメリカ)なりヨーロッパ)なりなわけなのだ。』

ということば、阪急だか京阪だかJRだかに乗って、ビルボードの上位にランキングされるバンドと一緒にスタジオアム級のホールを回る世界ツアーに出掛けてゆく、これもあり得るのだ。そう考えると、電車で偶然隣りに座り合わせた人が急にインテナーショナルに思えてきたりする、なことはないか。

普通だからこそスゴイ、
世界の少年ナイフなのである。

Shonen Knife

何度も繰り返すが、少年ナイフはどんな状況になってもいつも普通だ。つまりいつも変わらない。世界のトップになることを望んでいるわけではない。彼女達の目指す方向性、を考えるなら、それはあくまでもやりたいことをしているだけ、に帰結する。そこにはひねくれた方法論や、ましてや汗と血と涙のド根性なんてありはしない。

「海外に向けての特別な働きかけはしなかったです。ただバンドを続けていくための働きかけに努力はしたけれどもあくまでも海外のためではなくて、大阪でやってみようとした、初めは頭になかったから。」

と中谷美智恵がいうように、働きかけたのではなく、なるべくしてこうなった、のである。これを成功者の奢りとは思わないで欲しい。

「少年ナイフを聴きたい、とか好きだ、とかどんなバンドかなと興味を持って誰かが来てくれたれば、私達はそれでいい。大きな会場じゃないとプライドが許さないわ、とかそんなのは全然ないんです。私達のことを好いてくれる人が来てくれたらそれでいいんです。だから同じ、前のままなんです。2年前のどん底ハウスに出た時と同じなんです。」

好きなことをやる、それを好きでいてくれる人がいる。このシンプルな方式が少年ナイフの基本だ。野心なんて大それたものはないしなかった、そんな

な欲望の希薄さこそが少年ナイフ、なのだ、とこの際言ってしまうおう。ワールド・フェイマスになっても紋切り型ロケンローラー特有のビッグ・マウスを叩かないクールさ、だ。それはある種のアマチュア精神かもしれないし、リ

スナー気質かもしれない、それともメジャーになりきれないマイナー気質なのかもしれない。それが何なのか、は少年ナイフのライヴを聴いて、またアルバムを聴いて各人で判断して頂きたい。ドビックスを挿入する。と評された、一見わかり易い言葉と題材で書かれた詞の中にひっそりと身を潜める辛辣な視線に、ハッとすることがあるかもしれないし、伸び伸びと楽しそうなプレイを見て、至福を感じてしま

うかもしれない。だけど彼女達はあくまでも私達に近いスタンスでいてくれる。何しろビッグ・サクセスを手に入れたらその時はどうしますか？の問いに、

「ライヴ・ハウスでも作って、日本の、大阪とか京都とかの面白いバンドを紹介したり、海外から好きなバンドを呼んだりして、ライヴをやってみようっていうのをやれたら、楽しいだろうなあと思ってますね。」

と山野直子は答えてくれたのだ。普通だけとスゴイ。普通だからスゴイ。それが少年ナイフなのだ。



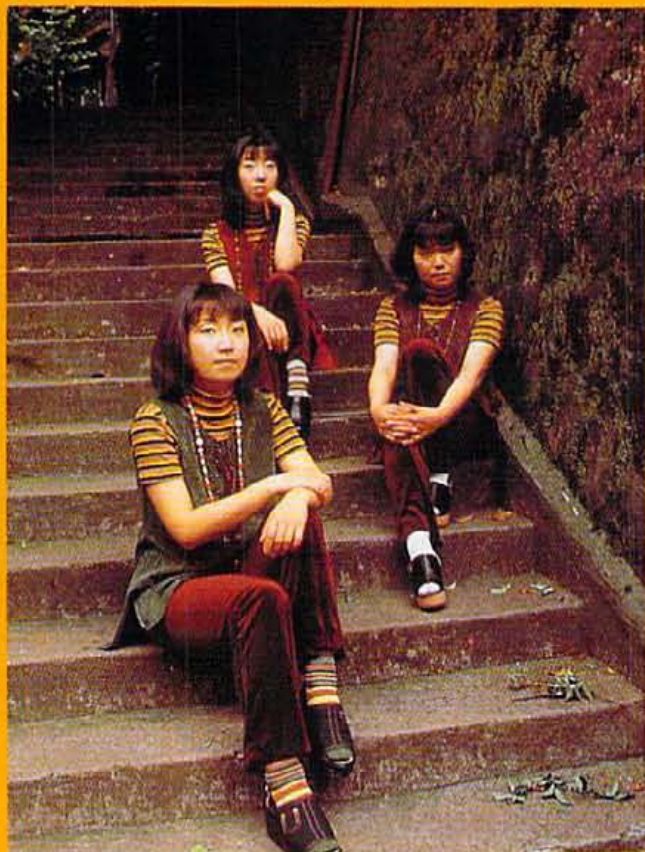
Shonen Knife

LADIES
ONLYLADIES
ONLY

0120-194-198
0120-194-054

TELEPHONE-CLUB
1年1組
でんわ組

SubCall 075-822-1231



PROFILE

- 1981年 12月29日、山野直子 (Vo.G)、中谷美智枝 (Vo.B)、山野敦子 (Drs) の3人で結成。
- 1983年 アルバム「バーニング・ファーム」を京都のZEROレコーズより発売。
- 1989年 アメリカ、ロサンゼルスでの初の海外ライブを行なう。アメリカで少年ナイフへのトリビュート・カバー・アルバム「Every band has a SHONEN KNIFE who loves them」がリリースされる。
- 1991年 8月、2度目のアメリカ・ツアーなどを行なう。
11月～12月、ニルヴァーナと共に全英ツアーを行なう。
- 1992年 8月、MCAビクターよりメジャー・デビュー。アルバム「レッツ・ナイフ」リリース。NYニューミュージック・セミナー出演。
- 1993年 アルバム「ロック・アニマルズ」発売。日本国内ツアー終了後、海外ツアーの予定。

■少年ナイフのサイン入りポラロイド写真を1名の方にプレゼント。
〒604 京都市中京区六角通烏丸東入ル 大塚六角ビル2F
クラブフェイム「少年ナイフくれ」係 11月末日必着



◆「Let's Knife」/3,000円(税込) / MCAビクター